

2024年12月3日

博士学位請求論文要旨

論文題目 ドイツ語圏の思想家による 20 世紀後半のコンピューター論
提出者 山崎裕太（中央大学大学院文学研究科独文学専攻博士後期課程 6 年）

①論文の主題（テーマ）、当該研究分野における位置づけ

本論は 20 世紀後半のドイツ語圏の思想家たちがコンピューターとテクノロジーをどのようにとらえてきたかを論じ、比較を試みる。思想家としてヴィレム・フルッサー(1920-91)、フリードリヒ・キットラー（1943-2011）、ニクラス・ルーマン(1927-98)、マルティン・ハイデガー(1889-1976)、ハンス・ブルーメンベルク(1920-96)を扱う。

時代の枠はハイデガーが技術およびコンピューターを積極的に論じはじめた 1950 年代から、ここで扱う思想家のなかで最も若いキットラーがコンピューターの系譜をメディア論の観点から振り返った 20 世紀終わりまでとする。

これらの思想家がテクノロジーに対してどのように考えていたかについてはすでに複数の文献が論じている。しかしながら、彼らのコンピューター論に触れた研究は限られおり、彼らのコンピューター論をまとめて論じ、比較した文献は管見の限り見当たらない。本研究は、それぞれの思想家の技術論とそれにまつわる先行研究をもとに、彼らのコンピューター論に焦点を当てる。

②論文の構成（目次・各章の概要）

目次

第一章 序論

第二章 後期ハイデガーとコンピューター

第三章 ハンス・ブルーメンベルクとコンピューター

第四章 コンピューターの本質は画像か文字か——フルッサーとキットラー

第五章 ニクラス・ルーマンの索引カード箱とコンピューター

第六章 結論

各章の概要

第一章 序論

序論ではそれぞれの思想家を思想史上にどのように位置づけられるのかを考察した。

ハイデガー、ブルーメンベルクは、人間の思考や威厳を脅かすテクノロジーにどう立ち向かい、共生していけるのかを考えた。フルッサーは、テクノロジーを用いていまだ現実には存在しない画像イメージをつくりあげることで、未来をデザインしていく道を見出した。彼らはフッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』に端を発するテクノロジー批判をそれぞれ独自の形で受け継いでいる。

ルーマンとキットラーはフランクフルト学派と対立し、反人間中心的な思想を展開した。両者はテクノロジー・メディアの側に立ち、人間の手から離れて自律性を持つメディアのありさまを叙述した。

コンピューターは第二次世界大戦から用いられたが、これらの思想家たちはタイプライターや索引カード箱といった、コンピューター以前のテクノロジー・メディアにも目を向けた。そうして培われたそれぞれの技術論が独自のコンピューター論を生み出している。そしてコンピューターが発展するにしたがい、彼らのコンピューター観も変化していく。

第二章 後期ハイデガーとコンピューター

本章はハイデガーの技術論をもとに彼がコンピューターについてどう考えていたかを論じる。ハイデガーは「技術への問い (Die Frage nach der Technik, 1953)」において現代テクノロジーを論じた。「ゲシュテル (Gestell)」はハイデガーがテクノロジーと機械の関係を説明したシステムである。川の流れを電灯の明かりなどに役立てる水力発電が例に挙げられる。ゲシュテルは人間をもそのシステムに取り込む。自然をエネルギーへ変換するよう人間を誘導し、人間をシステムのなかに組み込んでしまう。

本論で扱う思想家のなかでもっとも生まれが早いハイデガーは、生前パーソナルコンピューターの誕生を目の当たりにすることができなかった。彼にとってのコンピューターはメインフレームと呼ばれる大型のコンピューターであった。彼は1957年に出版された『ヘーベル一家の友 (Hebel — der Hausfreund)』において、翻訳機能、計算機能、思考機能を備えたコンピューターを「言語機械 (Sprachmaschine)」と呼んでいた。1962年に行われた講演のテキスト『伝承された言語と技術的な言語 (Überlieferte Sprache und technische Sprache)』では、人間の扱う自然言語が、機械によって作り出されるテクノロジー言語によってその本質を脅かされているといい、危機感を強めている。

コンピューターの発達により、「ゲシュテル」もまた新たな様相を示す。コンピューターはエネルギーの代わりに情報 (Information) を処理する。「規制循環 (Regelkreis)」と呼ばれる情報のフィードバック・システムが「ゲシュテル」に代わる新しいシステムだとハイデガーは考える。規制循環ではあらゆるものが計算可能なものとして情報に還元される。その

ような社会で生活する人間の思考は本質的な思考ではなく、単なる計算に過ぎないものに陥ってしまう。ハイデガーは、人間の本質を脅かすテクノロジーに対して人間がまずこの危機的状况を自覚し、省察すべきだと主張した。

第三章 ハンス・ブルーメンベルクのコンピューター論

ブルーメンベルクは1950年代から現代テクノロジーについての考えを新聞記事などで発表し始めた。彼の初期の技術論「主人なき計算 テクノロジーとの付き合いにおける不安定さについて (Die Rechnung ohne den Wirt. Von der Unsicherheit im Umgang mit der Technik, 1953)」では、アメリカの選挙などの事例をもとに、人間がテクノロジーを過信したり、過度に懐疑的になったりすることを指摘し、人間とテクノロジーがどのように付き合っているのかを考察した。

「技術の精神史を記述することの難しさ (Einige Schwierigkeiten, eine Geistesgeschichte der Technik zu schreiben, 1966/67)」は、テクノロジーと人間精神がどのように関わりあってきたかを考察した論文である。そこで彼はパスカルとライプニッツの計算機に触れている。ブルーメンベルクは彼らがテクノロジーを発展させる数学者であったとともに、人間精神を研究する哲学者でもあったことに注目した。ブルーメンベルクによれば彼らの計算機は、人間の思考プロセスを計算機の構造を参考に具体化し理解するための装置であった。

彼は現代のさまざまな社会的な状況のなかでコンピューターがどのような働きをしていたかに触れた。アメリカ合衆国の大統領選挙では迅速に情報を取り込んで処理する計算機として、株式市場では人間を介さないことによって株の取引を高速化する加速器として、飛行機やロケットの実験の場では、現実のフライトをシミュレーションするリアルタイム・シミュレーターとしてコンピューターは働いたが、ブルーメンベルクはそれぞれについて論じた。

続いて本章ではブルーメンベルクとハイデガーの技術論を比較した。ハイデガーは人間の本質的な行為である手書きを奪ったタイプライターや、人間の思考を単なる計算にしてしまうコンピューターに対して悲観的な見方をしていた。ブルーメンベルクによれば、テクノロジーの発達により人間の尊厳はオリジナリティのあるものを生み出す発明という行為に見出されるようになった。人間の尊厳が失われたというよりは、別の場所に移行したと認識していた。ブルーメンベルクは、リアルタイム・シミュレーションにより現実を超える体験ができるといい、むしろ現代技術をポジティブにとらえていたとも言えるだろう。

第四章 コンピューターの本質は画像か文字か——フルッサーとキットラー

本章ではフルッサーとキットラーの技術論、コンピューター論を比較し、コンピューターの本質が画像にあるのか、それとも文字にあるのかを問うた。フルッサーの『直線性の危機 (Krise der Linearität, 1992)』とキットラーの『データ・数・コード (Daten Zahlen Codes, 1998)』を中心として、別の著作も参考にしつつ両者を比較した。

フルッサーはカメラ、写真術をコンピューターへと至るメディアの系譜の中心に据えた。彼は洞窟の壁画から書物の時代を経て、カメラの発明以降ふたたび画像の時代へと移行するプロセスを説明した。近代数学の発展にともない、文字による歴史的・線型的な思考から数字による計算的思考へと思考方法が変化したことがカメラの台頭を促したという。写真術は映画やテレビといった映像メディアを生み出し、コンピューターのデスクトップに表示される画像にまで発展した。

フルッサーは、近代数学が人間の思考を計算的にさせたことに希望を見出した。コンピューターによっていまだ存在しない新しい画像を生み出すことで、人間がいまだ現実化されていないものをデザインしていく可能性を提示した。

キットラーはアルファベットの発明にはじまり、活版印刷、タイプライターを経てコンピューターが誕生した経緯を辿った。キットラーによれば、空白に任意の数字を代入する代数学が、活字を自由に並べかえて文章を作り出す活版印刷術を可能にした。彼はコンピューターを動かすための命令が 0 と 1 のみで行われていることに着目し、それが歴史的にアルファベットや数字、音符といった記号から派生してきたことを明らかにした。

フルッサーとキットラーはともに 0 と 1 をコンピューターの本質と認識しているが、ここに行きつく過程をフルッサーは写真術の歴史を中心にたどり、キットラーは活版印刷術から振り返った。

第五章 ニクラス・ルーマンの索引カード箱とコンピューター

本章はルーマンの社会学およびサイバネティクス論が彼のコンピューター論にどのように影響を与えたかを考察した。

ルーマンは論文の執筆や情報の整理のために、大型の索引カード箱を用いた。ルーマンの索引カード箱はアルファベット順に管理されている。それぞれのカードには数字が書き込まれており、別のカードの番号が参照先として書き込まれていることもある。ほかの索引カード箱と比べて、カード同士がコンピューターのハイパーリンクのように結び付けられているのである。

ルーマンは「索引カード箱とのコミュニケーション (Kommunikation mit Zettelkästen, 1981)」において、索引カード箱が第二の自己 (ein alter Ego) とも言えるコミュニケーションパートナーであると述べている。索引カード箱のなかでカード同士がお互いに関係し合うことによって、一種の自律的なシステムになるという。カード同士の組み合わせが、彼に新たな発想をもたらすのである。ルーマンの索引カード箱論の理論的なベースは、動物の神経と機械の制御システムを比較する学問分野であるサイバネティクスにある。チリの生物学者であるマトゥラーナとヴァレラは、生物が自らの細胞や神経を、フィードバックを繰り返しながら持続させてゆき、独立した自律的な秩序を生み出す機能であるオートポイエーシスという概念を提唱した。ルーマンの索引カード箱論における自律した第二の自己という発想は、サイバネティクスの理論に由来しているのである。

③論文の独自性

すでに述べた通り、これら五人の思想家のコンピューター論をまとめ、比較したことに本論文の独自性が見いだせる。

本論文で考察したそれぞれの思想家のコンピューター論は、今日のメディアの状況にアクチュアルに関連付けられる。ハイデガーはテクノロジーによる生活世界の隠蔽によって、人間が世界に対し盲目的になり、人間の自然な言語と思考が脅かされていると危惧した。それに対してブルーメンベルクはむしろコンピューターによるシミュレーションがリアルな体験を超えていると主張した。これは現在の VR 技術などを連想させよう。フルッサーとキットラーの比較は、現在の画像が中心となりつつあるソーシャルメディアを利用するユーザーと、プログラミングするプログラマーの乖離についての議論に繋がる。ルーマンの索引カード箱論は、昨今大きな議論を呼んでいる AI との会話を想起させる。

西洋思想に通暁するドイツ語圏の思想家たちが、20 世紀後半のメディアの状況を共有しつつ、初期のコンピューターをどのように理解したかをまとめ、比較したことが本論文の大きな意義である。

④今後の課題

本論文は五人の思想家を扱うにあたり、時代を 20 世紀後半と定め、一次文献を彼らのコンピューター論のエッセンスが充実しているものに限定した。これらの論を、彼らの業績全体のなかに位置づける作業は今後の課題としてのこされた。

ハイデガーの技術論にはユダヤ人差別も認められるが、本論では指摘するに留めた。これも深めるに値するテーマである。

研究対象はドイツ語圏の思想家に限ったが、たとえばキットラーのメディア論はジャック・ラカンからも影響を受けている。他のヨーロッパ言語圏でどのようにコンピューターが論じられており、ドイツ語圏の思想家とどのように影響を与え合ったのかも興味深い。

アジア、日本の思想家たちがそれぞれの思想史を踏まえてどのようにコンピューターをとらえたのか、これも今後の研究課題である。